
ゼロの使い魔～神龍になった男～

光闇雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜神龍になった男〜

【Nコード】

N6817S

【作者名】

光閻雪

【あらすじ】

死神のうっかりミスによって死亡した主人公。その上司の死神から『ゼロ魔』へと転生させてもらい……

神龍の姿でハルケギニアの地に降りた主人公が織りなす『ゼロの使い魔』の物語をお楽しみください

第一話（前書き）

雪

「はい。命知らずにも新連載開始です。どうか、長い目で見てください」

???

「では、本編をどうぞ」

第一話

「うん」

俺は先ほどまで携帯でドラクエ？をしながら隘路を歩いていた。だが、今俺は自分を見下ろしている。そして、遥か遠くへと逃げて行く車も見えた。これは所謂……

「轢き逃げか……」

「随分と冷静ですね。自分が死んだというのに……」

ふと後ろを振り返ると、そこには骸骨がいた。手にはでかい鎌。
うん、死神だな

「まあ、俺の状態を見たら死んだも当然だからな。で、あんたは？」

「見ての通り、死神ですよ」

うん。物凄く軽い。死神だったら、もう少し恐怖っぽい口調じゃないのか？

「いや、それは爺さん達の代だけですよ。俺たちの代はもう少し現代っ子ばくしてみようかと」

「心を読むなよ……………はぁ。まぁ、良い。で、俺をあの世へ送るのか？」

「いやゝ、それがですねゝ」

死神はそう言つと頭をかく。ちよつと、嫌な予感がビシビシと感じるんだが……………？

「本当は轢き逃げはされても無傷ですんだはずだったんですよ」

「うんうん」

「でも、部下のうつかりミスで死んじやいましたゝ テヘツ」

死神のポーズは無視するとして、嫌な予感が当たりました

「うつかりミスねえ……………」

「……………すみません。私の監督不行届です、はい。部下にはそれ相応の罰を科しますんで……………」

「はぁ……………もう良いよ。それで、俺はどうすればいいんだ？」

部下のうっかりミスで俺は死んでしまったワケで、話の流れからするとあの世に送られないっぽいが……………？

「えっと、本来はあなたを天界へ送るのが私の役目なんですけど、今回は大創造神のブラフ様の命により、特別にあなた様を別の世界での人生を歩んでもらうという事になりました」

「この世界じゃ、ダメなのか？」

「はい。天界での理で、その世界で死んだ者をその世界に新たに転生させてはいけないというのがありまして」

「ふん。で、俺をどこに転生さしてくれるんだ？」

「えっと、候補はこちらになります」

死神は懷から『もしもツーズ』で使用するようなルーレットを取り出した。意味が分からん

「これは……………？」

「えっと、ルーレットです。私のような死神は、まだ神様たちのように全ての世界へと転生させる事ができないので」

「うん。それは分かったが、何故ルーレット……………？」

「いや、希望の世界へと行かせられない事もあるんで」

死神は頭をかきながら弁解する。なるほど、この死神が送れる世界はこの九つの世界だけだから、人によっては希望の世界がないということになってしまつと……

【だったら、神様が直接きたら良いじゃないかというツツコミはなしでお願いします】

「まあ、良いや。それじゃ、回しますか」

「はい」

「よつ、と」

【ガラガラ】

勢い良く回り始めるルーレット。そして、ルーレットが止まった先は……

「『ゼロの使い魔』の世界。 使い魔召喚ルートですね」

「使い魔召喚ルート？」

「はい。 使い魔として召喚されるということですね」

「はあ……………」

使い魔として召喚ねえ……………まあ、俺は死んだから召喚されても良いワケだが……………」

「召喚されるというのは良いとして、誰にだい？」

「それはランダムです」

「あつそ。じゃ、送ってくれ」

「はい。でも、その前にですね。容姿の設定を行います」

「コピーでもするのか？」

「用紙ではないですよ。姿かたちのことです」

「ああ、そう言うこと。じゃ、ドラクエ？のしんりゅうが良いな」

ドラクエシリーズの中で人間では『テリー』が、モンスターでは『しんりゅう』が一番好きだし、使い魔と言ったら『しんりゅう』だよな

「了解です。あ、そうです。今回はブラフ様の計らいで能力を付加させていただきます」

「M A J I D E ! ?」

「はい」

「じゃ、ドラクエの呪文や特技を全て使えるようにしてくれ」

「了解です。 あ・・・・・・・・っ！」

一度頷いた死神だったが、何か思い出したらしくそこで言葉を句切る。何か不都合でもあるのか・・・・・・・・？

「人を生き返らすことや相手を即死させるような呪文・特技は使えませんので」

「まあ、当たり前だな。それで良い」

「了解です。 ああ、あと容姿が神龍なので、ドラゴラムを唱えると逆に人間になるようにします。その時の容姿はどうしますか？」

「おつ、ありがとうな。 じゃ、ドラクエ？のテリーで」

「了解です。 では、向こうの世界にお送りします」

そう言った直後、俺の真下に真っ黒な穴が開いた。 え！？

「それでは良い人生を」

「てめえええええええつ！　覚えておけよ――――」

「―――っ!?」

俺はそう叫びながら、奈落の底へと真つ逆さまに落ちて行つた

第一話（後書き）

雪

「感想・質問などがあれば送ってください」

死神

「誤字・脱字報告もお願いします」

雪

「ではでは」

第二話（前書き）

雪

「第二話、更新しました」

死神

「プリニータハールさん、闇の皇子さん、ヒョウガさん、感想をありがとうございます」

雪

「無理矢理な感じがしますが、どうぞ本編をお楽しみください」

第二話

……??? SIDE……

今、私がいるのはトリスティン魔法学園の春の使い魔召喚の儀で使
用されている広場。その広場には笑い声や感嘆、落胆様々な声が
満ちていた

「次っ！ モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モン
モランシ」

「はい」

名前を呼ばれ一歩前に出る。 いよいよ、私の出番。 ちゃんとで
きるか心配だけど、モンモランシ家に恥じぬようにがんばらないと。
……！

「……我が名はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェー
ル・ド・モンモランシ……」

皆が見守る中、私はサモン・サーヴァントのスペルを紡いでいった

……SIDE END……

【ヒュ、ズドン！】

「いたた。あの死神め…………落とすなら落とすって言うてくれよ…………」

さて、ここはどこだ…………？

辺りを見回してみると、そこはどこかの湖っぽい場所だった。丁度良い。容姿がどうなってるのか見てみるか…………

「おつ。神龍になってるぞ」

湖面に映る姿はドラクエ？の『しんりゅう』そのものだ。うむ。大きさは『しんりゅう』とほぼ同じ。つまり、非常に大きいという事だ

それはさておき、誰の使い魔になるんだろうか…………？ 死神（バカ）はランダムと言っていたが…………

まあ、考えるのもめんどいし、ここで色々試しておくか。そう考えた俺は周囲に誰もいないことを確認してから、死神から授かった能力を試していった

ある程度、呪文を試した結果、死神一（仮）が言った通り、メガンテやザキなどの死呪文やザオラルやザオリクなどの蘇生呪文は使用不可だった。いやゝ、メガンテを唱えるのはマジでビビったよ（汗）下手すれば、転生してすぐ死亡ってありえたからねえ

ああ、あと身体のサイズが自由に換えられることも発見したので、今はキュルケのサラマンダーぐらいのサイズになっている。さっきの大きさでは何かと不便だからな

【ピョコッ】

ん？ 頭の上に何かに乗ったようだな……………

「カエルか……………」

湖面に顔を映すと頭の上に黄色に黒い斑点模様の小さなカエル（メス）が乗っていた。どこことなく、見たことのあるカエルだったが、全然思い出せない

「竜さん、こんなとこで何をしてるの？ それにさっきまで使ってたのって先住魔法ってやつだよな？」

すると、頭の上のカエルが俺にそう話しかけてきた。 って、動物の声分かるよ。 ああ。 俺、龍だったね、今………

「先住魔法とはちょっと違うが、概ねそうだな」

「ふーん、そうなんだ」

「それにしても、嬢ちゃん。 俺が怖くないのか？」

「うん。 怖くないよ。 だって、竜さんには他の竜種にはない優しい感じがするもん」

「そ、そうか………ん？」

俺の問いに対するカエルの答えに苦笑いを浮かべていると、頭上に楕円形の大きな鏡のようなものが浮いていた

「竜さん、これって何だろう？」

「さあな。 分らんが、誰かに呼びだされた感じはするな」

「そうなの？」

「ああ」

頭上のカエルの問いに答えながら、俺は頭上の鏡を見つめていく。

さて、誰が俺の主人になるのか分からんが、頑張るとするか・・・

・・・

「さて・・・」

「竜さん、どうしたの？」

「いや、何。鏡の中が気になったから行こうと思ってな」

「そうなんだ。じゃあ、私も行っても良い？」

「・・・まあ、良いんじゃないか？ さて、余興に大きさを
変えて乗り込むとしよう。嬢ちゃん、しっかり掴まっておきな」

「うん」

カエルの嬢ちゃんが鬚に掴まったのを確認した俺は身体を最大サイズにしてから、鏡の中へと潜っていった

……モンモランシーSIDE……

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

サモン・サーヴァントを唱えたところ、鏡の中からとんでもないものがでてきた。　　そ、それは巨大な・・・・・・・・

「ミ、ミスタ・コルベール・・・・・・・・」

「うむ。　今まで見たことのない竜ですね。　今のところ危害を加えるようなことはしていませんが、用心はしておきましょう」

「は、はい」

私は咄嗟に先生の後ろに隠れてしまう。　だ、だって巨大な竜なんだもの。　こ、怖いじゃない・・・・・・・・！

「　我が名は神龍。　我を呼びだしたのは誰だ・・・・・・・・？」

「「「「「しゃ、喋った！？」「「「「」

突然、竜から声が発しられたため、驚いてしまう。　韻竜は言語を操ると言われてるけど、絶滅したはずだもの。　だから、今の竜種は声をだせないはず・・・・・・・・

「　もう一度聞く。　我を呼びだしたのは誰だ・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・ミス・モンモランシ。 契約を」

「は、はい。 わ、私が召喚したの・・・・・・・・！」

先生に背中を押され、意を決して一步前へとでながら意思表示をする。 私も貴族の端くれよ！ こ、これぐらいでビビったりなんかしないわ！

「 お前か・・・・・・・・して、我を呼び出したのは・・・・・・・・いかなる用件だ？ 」

「つ、使い魔として召喚したのよ！」

「ぶおおおおおっ！！！！！！！！！！」

「「「「「！！」「」「」

私がそう叫んだ瞬間、竜が雄叫びをあげた。 それにより、思わず耳を塞いでしまった。 な、なんて音量なの・・・・・・・・！！？

「 用件を承った。 我、汝を主人と認めん 」

しばらく目を瞑って耳を塞いでいて、気が付いたら竜の顔が私の目の前にあった。 そして、竜はそう言葉を紡いだ。 え、ということ・・・・・・・・？

「…………ミス・モンモランシ。この竜はどうやら、あなたを主人だと認めたようです。それに召喚したのはこの竜だけではないようですね」

「え？」

「竜の頭上を御覧なさい」

先生の指差す方向を見ると、そこには黄色に黒い斑点模様の小さなカエルが竜の鬣にしがみ付いていた。な、なんて可愛いカエルなの……………!?

「…………ミス・モンモランシ。早く契約を」

「あ、はい！」

先生の言葉に我に返る。そ、そうだね。可愛いカエルに見惚れてる場合じゃない。け、契約しないと

「我が名はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。五つの力を司るペンタゴン。この者たちに祝福を与え、私の使い魔となせ」

私は『コントラクト・サーヴァント』のスペルを紡ぐと、龍とカエルに口づけを交わした。すると、カエルと龍にルーンが刻み込まれたのだった

……SIDE END……

第二話（後書き）

雪

「主人公の召喚主はモンモンにしました。モンモンだと嫌だなあという方もいらっしゃると思いますが、ご容赦ください。また物凄く危険な予感しますが、長い目で見守ってください」

死神

「感想・質問などを良かったら送ってください」

雪

「ではでは」

第三話（前書き）

雪

「第三話、更新しました」

死神

「ヒョウガさん、プリニーラハールさん、んんん（・・）さん、アレックスさん、h a l l ーさん、きらとさん、感想ありがとうございます」

雪

「では、本編をどうぞ」

第三話

「お前か……………」

俺を呼び出したのは、どうやらモンモランシー（通称：モンモン）らしい。ということは、鬣に引っ付いているカエルのお嬢ちゃん
はロビンか……………」

さて、ここで用件を知っているのも何か違うだろう。　ここは訊いた方がいいな

「……………して、我を呼び出したのは……………いかなる
用件だ？」

「つ、使い魔として召喚したのよ！」

「ぶおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」

「「「「「!!」「」「」

モンモンがそう叫んだ瞬間、雄叫びをあげる。　簡単に了解するのは
癪だからな。　ちよつとした余興だ

おっと、ロビンもいたんだっとな

「おい、お嬢ちゃん。そのモンモンとやらが我々を使い魔として召喚したみたいだが、どうする?」

「(モンモン?) う、うん。 竜さんは使い魔になるの?」

「うむ、なってみるのも面白い。 お嬢ちゃんは どうする?」

「私、竜さんみたいに何もできないけど、使い魔になりたい!」

「そうか……」

俺はロビンが使い魔になりたいというのを聞き、耳を塞いでいるモンモンに顔を近づけて

「 用件を承った。 我、汝を主人と認めん 」

と口調を変えて返事をする。 モンモンは少し呆気にとられていたが、コルベール(通称:コルさん)が近づいてきて口を開いた

「……ミス・モンモランシ。 この竜はどうやら、あなたを主人だと認めたようです。 それに召喚したのはこの竜だけではないようですね」

「 え? 」

「 竜の頭上を御覧なさい 」

コルさんが指差す方向をモンモンが見つめる。すると、ロビンが鬣にしがみ付いているのを見つけたのか、物凄く目をキラキラさせた。どうやら、ロビンを気にいったようだ

「……………ミス・モンモランシ。早く契約を」

「あ、はい！」

モンモンはコルさんの言葉に我に返ると

「我が名はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。五つの力を司るペンタゴン。この者たちに祝福を与え、私の使い魔となせ」

という『コントラクト・サーヴァント』のスペルを紡いで、俺とロビンに口づけを交わした。すると、身体が燃えるように熱くなる

「大丈夫だったかい、お嬢ちゃん？」

「う、うん。ちょっと痛かったけど、大丈夫だったよ」

「そうか」

小説では才人が物凄く痛がっていたので、それよりも小さいロビンが心配になったが、どうやら大丈夫そうなので安心した。俺は図体が大きいので痛みはほばなかった

「お嬢ちゃん、主の肩に乗れるかい？」

「う、うん」

ロビンはそう言うとモンモンの肩に飛び移る。モンモンは少し驚いたが、ロビンの可愛らしさに再度見惚れたみたいだ

「ミス・モンモランシ。無事に終わりましたね」

「あ、はい！」

モンモンはそう言うと、生徒たちの中へと戻って行く。皆は『す、すごい！』とか『凄い竜を呼びだすなんて大したもんだよ』とかなど、モンモンに感嘆の声をあげていた

おっと、俺がここにいと召喚の邪魔だな。そう思った俺は、人だかりの頭上を通り過ぎて風韻竜（シルフィード）がいる木の辺りに向かった。そして、身体を変化させて木の頭上で休む体勢になる

「……では、次——」

それを見て呆気にとられていたコルさんだったが、気を取り直して召喚の儀を再開させた。それを見つめながら、ふと下からの視線に気付く。視線を向けると、シルフィードがこちらを見つめていた

「…………お嬢ちゃん。何か用かい？」

「あ、あなた様は何者なのね!？」

「(様…………?) さっき言ったはずだが? 俺の名は神龍。ぜひ、お見知りおきを」

俺がそう言つと、シルフィードはさらに驚いてしまう。俺、何か驚かれるようなこと言つたか?

「あ、あなた様は…………ちよ、長老たちが言っていた。我々、韻竜の神様なのね？」

「ん? 言ってる意味が分からんが、たぶん違つぞ。俺はそんな大層な竜ではないよ」

「そ、そうなの？」

「ああ。だから、そんなに怯えないで欲しいね。同じ使い魔同士、仲良くやろうや」

「う、うん。 分かったのね」

シルフィードは納得してない表情をしながらも頷くと、広場の真ん中の方に視線を戻した。 さて、才人はいつ出てくるかな？ そう思いながら、俺も召喚の儀をやっている方に視線を向けた

それから、数人が召喚の儀を行い、それぞれの使い魔を召喚していた。 そして、最後にコルさんと呼ばれたのは、ルイズだった。 いいよ、才人の登場か……

「あんだ誰？」

何十回か失敗して、やっと才人を召喚したルイズ。 それにしてもあの爆発は凄いなあ。 喰らってないから分からないが、あの威力はイオまたはイオラぐらいあるかな……？ 下手すりゃ、イオナズンぐらいにもなるんじゃないか……？

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

そんな事を考えていると、誰かがそう言うのが聞こえた。平民ねえ……原作でも思ったけど、この坊っちゃん、嬢ちゃん方は相当悪い影響を親から受けてるらしいなあ。まあ、それは仕方がないから俺がどうこうするつもりは毛頭ないけどね

ん？ ルイズが才人に近づいているぞ。　どうやら、才人と使い魔の契約をするみたいだな

「あんだ、感謝しなさいよね。　貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

ルイズはそう言うと、手に持った小さな杖を才人の目の前で振った

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

うん、名前が長い。一度に覚えるなんてできっこないな、これは。まあ、覚える気もないが……

そんなどうでも良いことを考えていると、ルイズが才人に口づけをした。才人は身動きできずに、横たわっている。　はは、確かフ

アーストキスだっけか。まあ、可愛いお嬢ちゃんに奪われたんだから、これはこれで良いんじゃないか………？

「終わりました」

ルイズは顔を真っ赤にしている。照れてるらしい

才人が喚き散らしているが、完全に無視するルイズ。まあ、ルイズは平民だと思っているのだから、仕方がないと言えば仕方がないな

「『サモン・サーヴァント』は何回も失敗したが、『コントラクト・サーヴァント』はきちんとできたね」

おっ。　　コルさんは嬉しそうだねえ。　　まあ、生徒の召喚と契約が上手くいったのだから、嬉しいに決まってるか。　　問題は………

「相手がただの平民だから、『契約』できたんだよ」

「そいつが高位の幻獣だったら、『契約』なんかできないって」

こいつらだよなあ………

「バカにしないで！ 私だつてたまには上手く行くわよ！」

「ほんとにたまによね。ゼロのルイズ」

で、俺の主は主で、ああだからなあ

「ミスタ・コルベール！ 『洪水』のモンモランシーが私を侮辱しました！」

「誰が『洪水』ですって！ 私は『香水』のモンモランシーよ！」

「あんた小さい頃、洪水みたいなおねしょしてたつて話じゃない。

『洪水』の方がお似合いよ！」

「よくも言ってくれたわね！ ゼロのルイズ！ ゼロのくせり——
(ヒョイ) え？」

これ以上、ヒートアップさせるワケにはいかないため、モンモンのマントを口で摘まんて持ち上げる。そして、頭にヒョイっと乗せた。モンモンは『きゃあっ！？』と言って頭の鬘にしがみ付く。

ちなみにロビンはモンモンと一緒に俺の頭の上だ

「これ以上、無様なマネはやめなさい」

「う………っ!？」

何か言おうとするモンモンを威圧感たっぷりの声で黙らせる。才人は俺の姿を見て呆気にとられていたため、使い魔のルーンが刻まれているのには気付いていないみたいだった

「…………ふむ……………」

我に返ったコルさんは才人の左手の甲を確かめる。そこには『ガンドールヴ』のルーンが刻まれていた

「珍しいルーンだな」

「何なんだあんたら！」

才人が怒鳴るが、誰も相手にしない

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ」

コルさんは踵を返すと、宙に浮いた。才人はその状況にまたもや口をあぐりと開けている。まあ、現代日本に住んでいた才人にとってはファンタジーの世界だもんな。そのようになるのも頷ける

「あ、あの……………」

「ん？」

「教室に……………」

「ああ、そうだったな。しっかり掴まってなさい」

「は、はい」

何故かモンモンが大人しい。まあ、さっきの俺の威圧で少し萎縮してしまったのだろう。そう思うことにした俺はコルさんや他の生徒たちの後について行くのだった

あの後、復活したモンモンは俺たちに名前を与えた。カエルのお嬢ちゃんはロビン、俺はシェンという名前が与えられた。そして今、俺は学園の隅で寛いでいた。まあ、モンモンの部屋で寝ても良かったが、俺も一応男なのでこちらで休むことにしたワケだ

「そう言えば、ドラゴラムを試してなかったな。　ちよつくら、試してみるか。　「ドラゴラム」」

ドラゴラムの呪文を唱えると、みるみる俺の身体が小さくなり、最後には人間になった。　夜暗いから、本当にテリーになっているのかは分からないが、人間であることは分かる

「まあ、顔はいつか見る機会があるだろう。　ん？　腰に何かが・・・おつ。　これは剣じゃないか！」

腰に何かがあるのに気付いて調べると、何と剣が差してあった。しかも、『ドラゴンスレイヤー』だね、これは・・・ん？　柄の部分に紙が巻きついてるぞ・・・？

「これは死神からの手紙じゃないか」

俺は明るく死角になる場所まで来ると、手紙を読み始めた

『お詫びとして人間になった際、剣が現れるようにしました。　剣はあなたが一番欲しいと思ってる姿になっていると思います。是非、お使いください。　なお、この手紙は十秒後に消滅します』

きっかり、十秒後に手紙は消滅した。 何、この演出……
？ まあ、良いや

これでテリーの剣技の練習ができるからしな。 有難くもらってお
こう

「さて、今日は遅いし寝るとするか……」

俺は神龍へと戻り、学園にある樹木の上へと向かう。 そして、休
む体勢をとって眠りについたのだった

第三話（後書き）

雪

「ええ、主人公の名前をシエンということにしました。神龍だからシエン……安直な名前ですが、皆さまどうかよろしくお願いします」

死神

「ええ、主人公のシエンのご挨拶です。どうぞ」

シエン

「改めましてシエンです。皆さん、どうかよろしくお願いします」

死神

「ありがとうございます」

雪

「感想・質問などを良かったら送ってください」

死神

「ではでは」

第四話（前書き）

雪

「第四話、更新しました」

死神

「使徒さん、卯月燈香さん、ヒヨウガさん、ユウスケさん、agu dogarudoさん、武藤遙矢さん、感想ありがとうございます」

雪

「では、本編をどうぞ」

第四話

髭が誰かに触られている感覚で目を覚ますと、そこには小鳥が二、三羽いて、俺の髭などを啄んでいた。そして、俺が目を覚ました事に気づいた一羽の小鳥が

「おはよう、竜さん」

「ああ、おはよう」

と挨拶してきたため、挨拶を返す

その後、小鳥たちと話をしながら俺の事をどう思つか聞いてみた。

それによると俺には他竜のような危険な雰囲気がないらしい。

俺は昔から小鳥とか動物が大好きだったから、この状況は物凄く感動ものである。そして、動物たちの言葉が分かるというのは良いものである

「竜さん、じゃあまたね」

「ああ」

と感慨深く思いながら小鳥たちが森へと飛び立っていくのを見つめる

「さて、この後はどうするかなあ」

俺は身体の大きさを小さくしながら考えていく

「・・・・・・・・ん？ あれは・・・・・・・・？」

ふと、空を見上げるとシルフィードがいるのに気がついた。そして、その背中にはタバサが乗っているのが見える

って、千里眼かよ・・・・・・・・何、このスペック・・・・・・・・

ま、まあ良いや。それにしても、アイツら何をしてんだろう？
少し気が引けるが、何となく気になったため、昔学んだ読唇術（先生には物凄く褒められた）で読みとることにした

「・・・・・・・・あのちびすけ。ほんとに竜使いが荒いのね。まったく、いくら外の世界を見てみたいからって、使い魔なんかにな

るもんじゃないのね』

読みとった結果、シルフィードにタバサが命じたのは“人間に化けてトリスタニアに買い物に行く”というものだった。面白そうだったので、シルフィードの後について行くことにした

もちろん、モンモンには許可を得ているぞ。まあ、『はい。行っていいです』と敬語だったのは笑えたけどな

『ご飯につられたとはいえ……このわたしをつかいつぱにするなんて、罰当りもいいところなのね!』

魔法学院のメイド服を着せられたシルフィードは、ぶつぶつと文句を言いながらトリスタニアの街を歩いている。それは良いんだが、石ころを蹴飛ばしたり、頭をかきむしってみたり……もうちつと大人しく歩けないのかねえ

ちなみにタバサの注文は、本屋で、何冊かの本を買ってくるというものだ。で、ここが本屋なのだが……シルフィードは少年聖歌隊のパレードの後についていて見えなくなつた

はあ……アイツ大丈夫なのか？

「たく……」

そう呟いた俺は急いでシルフィードを追ったが……シルフィードの姿が見えなくなっていた。うん、完全に見失った……

「どうすつかねえ……………」

そう呟きながら歩いていると、お腹がなった。そう言えば何も食べてなかったつけ……………どうすつかねえ。金は持っていない……………」

「ん？」

どうするか考えながらしばらく歩いていると、目の前の紳士の懷から財布らしきものをスッている男が目に入る。たく、どこの世界にもそんな事をする輩はいるもんだな

そう思った俺は通り過ぎようとした男の手を握り、捻りあげる

「いたたたたっ！ 何しやがる！」

「……………懷のものを出しな」

「何を言っ——いたたたっ！？ 分かった、分かった。出すよ、出せばいいんだろう！？」

男は慌てて懷から紳士の財布を取り出すと俺に渡す。そして、俺が手を緩めると脱兎のごとく逃げていった

いやゝ、初めてやったけど、上手く行っただよ……やればできるもんだねえ

おっと、そんなことを考えてる場合じゃなかった。これを返さんと

「その紳士」

「え？ 私かね？」

今の遣り取りを見ていた野次馬の中から、さっきの紳士を呼ぶ。呼ばれた紳士は自分が呼ばれるとは思ひもしれなかったのか恐る恐る俺に近づいてくる

「これはあなたのだろう？」

「え！？」

俺が財布を見せると紳士は、慌てて財布がないことを確かめていった。そして、財布がないことに気が付くと

「ありがとう！ 何てお礼を言っているのか」

「お礼はいい。　　今後は気を付けることだ。　　ではな」

俺はそう言つと街の路地へと入っていく

あ、お礼で金をもらえば良かった。　　ま、良いか。　　良いことをするの
は気持ちが良いもんだからな

「おつと、本屋に戻るか」

俺は本屋へと戻ろうと踵を返そうとしたところ、森へと向かうシル
フィードと老紳士が目に入った。　　何をしてんだアイツは……………
・？

で、様子を見てみると、シルフィードが縄で縛られて馬車に放り投
げられるのが見えた。　　うん、ありゃ誘拐だね……………つて、
誘拐！？

「ヤバいじゃねえか……………！」

俺は慌てて森の方へ駆けだしていく。　　しかし、一足遅く馬車は二
台ともどこかへ行ってしまった

「ち……………っ！　　ん？」

慌てて変身を解こうとすると左目に魔法学院の様子が映った

「これはモンモンの視界か・・・・・・・・」

そこは魔法学院の食堂だった。で、視界の目の前にはギザなギーシュいて、その直後テーブルに置いてあったワインのビンを掴み、中身をどぼとギーシュの頭の上からかけた

それには覚えがあつた。たしか、これは・・・・・・・・ああ、ギーシュと才人の決闘か・・・・・・・・って、そんなことしてる場合じゃない・・・・・・・・！

俺は急いで変身を解くと、上空へと上がって馬車を探す。そして、馬車を見つけるとその後を追っていった

馬車からある程度の距離を保って追跡していると、夕方になってし

まった。シルフィードだけだったら、そのままやつつけても良かったが、中にはシルフィードの他にも少女たちが誘拐されているため、迂闊に手を出すわけにはいかなかったのだ

「さて、どうすつか・・・・・・・・ん？ あれは・・・・・・・・関所か・・・・・・・・」

上空からその様子を見つめていると、中年の役人が二人、馬車の中を覗き込む。しかし、見張りの男はニヤニヤと笑みを浮かべているだけだった。そして、役人の中で上官と思しき人物（貴族みないだな）がもったいぶった仕草で、目録を見つめながら

『積荷は小麦粉とあるが・・・・・・・・』

すると、見張りの男はさらに笑みを深くした

『どっからどう見ても、立派な小麦粉でしょう？』

見張りの男は、懷から革袋を取り出し、それを役人に手渡した。中を改め、役人はもったいぶった様子で頷いた

『なるほど。確かに小麦粉だな』

「はあ………良い貴族というのは本当に少ないな………」
「

と呟いていると、馬車の方が騒がしくなった。　どうやらシルフィードが怒っているみたいだな

バシィ！とここまで届くような破裂音がしたかと思うと、馬車の幌が破れてシルフィードの姿が見えた。　その衝撃により、見張りの男や、役人たちが吹き飛ばされていった

「くけー！」

あまり迫力の感じられない雄叫びをあげる。　我に返った見張りの男が獣を握って立ちあがるのが見えた。　あれは火縄銃のような構造のようだ

男が引き金を絞るが、その一足早くシルフィードが男を前足で払った。　同時にドーンツ！と銃口から火花と共に銃弾が打ち出され、俺に向かって飛んできた

「つて、危ない！」

咄嗟に身体を捻って弾を避ける

下を見ると吹き飛ばされた見張りの男はしたたかに地面に打ち据え

られたのか気絶をしていた

「たく。 無茶するなあ……………アイツは……………」

早く助けたいが敵が何人いるか分からないので、容易には動けない。
しかし、そうこうしてるうちに御者台にいた二人が系のようなものを飛ばし、シルフィードの自由を奪った

その系はシルフィードが暴れても千切れない。 どうやら相当な強度の系のようだ。 さて、どうするか……………」

『この竜……………突然現れたがつて……………いつたいなんだっていうんだ?』

『誰かがこの竜に、女になる魔法でもかけたんだろうさ』

あらら、シルフィードが先住魔法が使える韻竜だとは気付いてないみたいだ

『とにかく、仕事の邪魔だからやっちまおうぜ』

男たちは杖を掲げた。 これはヤバイ……………仕方がない……………
……………

「〔バギクロス〕」

俺は上空からバギクロスの呪文を唱え、巨大なかまいたちでシルフィードに絡まっている糸を切っていく。同時に巨大で猛烈な竜巻が、杖を構えた二人を吹き飛ばしていた。あの威力の魔法は……
……タバサか……？

『ぐへッ！』

二人は立ち木に激突して、そのまま地面へと崩れ落ちる。激しい砂埃の中、ゆらりと小さな影が現れた

『ち、ちびすけ……』

タバサを見てシルフィードがそう呟いている。タバサは眠そうな目のまま。ぼんやりと突っ立っていた

ふむ……タバサが来たのなら、俺の手番はないな

「帰るか……」

そう呟いた俺はその場を後にして学院へと帰っていく。この姿を

見られてもあれなので『レムオル』の呪文を唱えて……

【その様子をタバサが見ていましたが、シェンは気付きませんでした】

……第三者SIDE……

「……………」

タバサはシェンが消えたことに驚いていました。先程のシルフィードに絡んでいた“蜘蛛の糸”を容易く切り裂いた魔法はタバサも見ることがなかったので、あの竜は何者であるのかと考えていました

その時、後ろの馬車から、ゆらりと一人のメイジが降り立ちました。“頭”と呼ばれていた人物で二十歳を過ぎたばかりの女性でした

倒れていたメイジが、彼女を見て哀願するような声をあげました

「あねご！」

「まったく、だらしないね。油断するなど、いつも言ってるだろっ?」

それから彼女はタバサを見つめると、唇の端を持ち上げて冷笑を浮かべました

「おやおや、あんたは正真正銘の貴族のようだね。こりやちょうどいい」

タバサは空を見上げることをやめて女頭目と対峙しました。その表情は、いつもと変わらないものに戻っていました

「どうしてメイジが人さらいなんかやってるんだ？　って顔だね。あんたは貴族のようだから、きちんと冥土の土産に教えてやろう。あたしは女だが、三度の飯より“騎士試合”が大好きでね。伝説の女隊長のように、都に出て騎士になりたい、なんて言ったら、親に猛反対されたのさ。で、こつやつて家を出て、好きなだけ“騎士試合”ができる商売に鞍替えしたってわけだ」

「ただの人さらい」

タバサがそれだと言うと、女頭目はにやりと笑いました

「そりゃあ、食うためにはしかたないさ」

「あねご！　やっちまってください！」

倒れた手下の男たちが叫びます。女頭目は首を振りしました

「なに、これは騎士同士の“決闘”だよ。順序と作法つてもんがある。さて、正々堂々というじゃないか」

「わたしは“騎士”じゃない」

タバサは短く告げ、杖を構えました。すると女頭目は、首を振りました

「“騎士試合”に付き合わないっていうんなら、あの竜と女たちに魔法を飛ばすよ」

杖をシルフィードや縛られた少女たちに突きつけ、女頭目が言いました。シルフィードは咄嗟に少女たちを庇うように翼を覆いました

その様子に女頭目は笑みを浮かべると、杖を構えて優雅に一礼しました。めんどくさそうに、タバサもそれに合わせて礼をした瞬間・
・・・女頭目の魔法が飛びました

「卑怯者！」

思わずシルフィードは叫びました。しかし、風の刃がタバサの胸を襲うと瞬間、タバサは驚くべき反応速で、横に飛びました

女頭目の目が丸くなります

一瞬で呪文を完成させたタバサは、その体術に驚く女頭目目掛けて魔法の矢を放ちました。勝負は一瞬でつき、魔法の矢が女頭目の持った杖を切り裂き、同時にその服を地面に縫いつけたのです

信じられない、といった顔で、女頭目はタバサを見上げました。

あれほど素早く身体を動かせることも驚きながら、その魔法の詠唱の素早さと、コントロールの正確さは感嘆に値しました。魔力は同じでも、それを扱う腕前は、天と地ほどの差があったのです

「あ、あんた、何者………」

女頭目は、信じられないと言った顔で、タバサを見つめました

「ただの学生」

タバサは、小さな声で答えました

人さらい達と、賄賂を受け取った役人たちを警邏の騎士に引き渡し、少女たちを自由にやって後、タバサはシルフィードの背に跨りました。シルフィードは素直にそれを受け入れ、その場を飛び立ちました

そして、魔法学院へと帰る途中、シルフィードはタバサから『シルフィード（風の妖精）』という名を与えられ、双月の明かりが照らす中、シルフィードはきゅいきゅいと楽しげに喚き続けました

タバサはそれをBGMに本を読み続けながら、あの龍…….モンモランシーの使い魔の事を考えていました

「……あの竜は」

「え？ どうしたのね、お姉さま？」

「何でもない」

「？」

タバサはそう呟くと本を読むのに専念し始めました

……SIDE END……

関所から戻ってきた俺は、ベットで寝ている才人の怪我をルイズがない隙に『ベホマ』の呪文を唱え、傷を塞いで体力を元に戻した。

まあ、直ぐに起き上がったではマズいので『ラリホー』の呪文を唱えて才人を眠らしたのは言うまでもない。で、ギーシュのことをロビンに愚痴つてたモンモンに帰ってきたことを報告した後、昨日からの俺の寢床である木の上で眠っていると、誰かがこつちに近づく気配がした。目を開けるとそこには黒髪の少女がいた

「・・・・・・・・・・・・・・・・何か用かい？ お嬢さん」

「（ビクッ）は、はい！ つつつ使い魔さんの、おおおおお食事を用意しました！！ で、では・・・・・・・・！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（苦笑）」

用件を聞くと、物凄くテンパりながら肉の入った籠を置き、お辞儀をすると走って戻ってしまった。俺は苦笑しながら、それを見つめていく。そんなに怖がらなくても襲ったりはしないんだがなあ・・・・・・・・

「ふう・・・・・・・・まあ良いや。 よつと・・・・・・・・」

首を伸ばして籠の持ち手を加えて持ち上げる。で、中身を見ると物凄く高そうなお肉（生肉）が入っていた。うむ。どうするかな・・・・・・・・お、そうだ

「「メラ」」

肉を空へ放り投げて『メラ』の呪文を唱える。で、落ちてきた肉をパクつと食べると、程良く焼けた良い焼き肉になっていた。うむ・・・・・・・・火加減はこれぐらいかな・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・（だらだら）」

「ん？」

気が付くと、涎を垂らしたシルフィードがこちら・・・・・・・・いや、肉を見ていた。で、その背中にはタバサがこちらを見据えていた。あちゃ、魔法を見られたかな？

「・・・・・・・・あなた何者？」

「何者かと聞かれる前にお嬢さんの方から名前を言うのが筋というのもの」

「・・・・・・・・タバサ」

「あたしはシルフィードなのね！」

「うむ。我は神龍。それ以上でもそれ以下でもない、ただの龍だ」

タバサとシルフィードが名前を言ったので、そう返す。タバサは俺の目をジッと見つめてきたので、俺もジッと見つめる。まあ、正体は元人間で転生者？だが、それを理解できるワケがないので黙々とくに限る

「……………そう」

タバサはそう呟くとシルフィードと共に学生寮に向かう。そして、自分の部屋の窓の下へと来ると、シルフィードの背中から部屋の中へと飛び降りた

で、シルフィードはタバサが部屋の中に入ったのを確認すると、こちらにやって来る。何だ……………？

「あのあの、お肉ちょうだいなの」

「肉かい？　まあ、良いが、ご主人は許可したのかい？」

「うん。　さつき分けてもらっても良いっていったの！」

「そうかい。　俺はもう良いから、全部食べなさい」

「ありがとつなの」

肉の入った籠をシルフィードの近くに持っていくと、シルフィードはお礼を言っ物凄い勢いで食べ始めた。　そんなにお腹がすいて

たのか？

「そんなに慌てて食べなくても、肉は逃げないぞ？（苦笑）」

苦笑しながらそう呟くが、シルフィードは耳に入らなかったのか、勢いが衰えずに食べていく。やれやれ……

「美味しかったのね♪」

「それは良かった。じゃ、その籠は俺が片付けておくから、帰きなさい」

「分かったの♪ ありがとうなの♪」

で、食べ終えた時、物凄く良い笑顔でそう言ってきた。つられて俺も微笑んでそう返すと、シルフィードはお礼を言って中庭へと帰っていった

俺はそれを見送った後、籠を啜えて食堂の方へと持っていく、入口に置くと寢床の木に戻る

「さて、明日はテリーの特技の練習でもするか……」

と呟きながら眠りについたのだった

第四話（後書き）

雪

「はい、ギーシュと才人は原作通り決闘を行いました」

死神

「まあ、それは良いんですが、今回のシエンはスリから財布を奪い返したり、シルフィードを少しだけ助けたりしたただけですね」

雪

「良いじゃないですか、シエンのコンセプトは陰で助けるですからね」

死神

「はぁ……………そうなんですか……………」

雪

「感想・質問などを良かったら送ってくださいね」

死神

「……………逃げましたね」

第五話（前書き）

雪

「第五話、更新しました」

死神

「武藤遙矢さん、きらとさん、ユウスケさん、墮落したユグドラシルさん、感想及び誤字報告ありがとうございます」

雪

「本編に行く前に注意事項があります。 本編に登場する『ドラゴンクエストシリーズの魔法・特技』の描写等は私の偏見ですので、おかしい部分もあるかと思いますが、ご了承いただけますようお願いいたします。 では、本編をどうぞ」

第五話

数時間後、誰かの気配がしたため、目を覚ます。顔を動かさずに視線だけを向けると、一人の少年が近づいて来ていた。恰好からいつてここの学院の坊っちゃんだろう

「…………ギーシュの奴、あんな平民に負けるとは情けない奴め。貴族の面汚しだ。まあ良い。ギーシュはドットメイジ。ラインメイジである僕とは雲泥の差だ」

少年は俺が目を覚ましているのにも気付かず、ぶつくさ言いながら近づいてくる。どうやら、俺に用があるらしい。少年は寢床の前にくると立ち止まり

「それにしても、この竜はなんて美しく頼もしいんだ。これは僕に従えてこそ意味があるのだ。決して、あのモンモランシーではない」

と俺を見上げてそう呟く。大した自信だな……………小僧……………

注意：シェンの精神年齢は二八歳です

「おい！ 目を覚ませ！」

小僧がいきなり命令してきた。 何だかムカついたので、無視・・・

「おい！ 聞いているのか！ この僕、ヴィリエ・ド・ロレーヌが命令してるのだぞ！」

無視・・・

「おい！ 起きろ！」

無・・・

「起きろよ！」

「・・・ 何か用か？ 小僧」

「なっ！？ き、貴族に向かって何様のつもりだ！？」

無視しようかと思ったがうるさいので顔を上げて口を開く。 その言葉が気に入らなかったのか小僧はそう怒鳴り散らす。 はあ・・・

「貴族がどうした。　我は神龍。　我が従うのは我が認めた者だ
けだ」

俺はそう言つと身体を巨大サイズにして、小僧を睨みつける

「ややややる気か！？　ほぼぼぼ僕はローヌ家出身だぞ！？
風系統のメイジだぞ！？」

はぁ・・・・・・

「ぶぉぉぉぉぉぉぉぉぉー！！」

「うわっ！？」

雄叫びをあげると、小僧は尻餅をついてしまう。　俺は身体を縮小
して寢床に戻り

「　帰れ、小僧。　お前には我を従えるだけの実力がない」

「なっ！？　何だと！？」

と告げて小僧を睨みつける。　まあ、実力云々は嘘で、ただ単にこ

いつに従うのが嫌なだけだがな

「くっ！ いい気になるなよ！ ラグーズ・ウォータル・イス・イ
ーサ・ハガラーズ」

頭に血が上ったのか小僧は杖を取り出し、呪文を唱えて氷でできた
槍をこちら目掛けて放ってきた

「やれやれ……………」

俺はそう呟き、『ひのいき』で氷の槍を跡形もなく消しさと、小
僧を睨みつける

「何！？」

「無駄なことはやめろ。 お前には我は倒せん」

「氷の槍を消したぐらいでいい気にならないでもらいたいね。
ジャベリン
くぞー！」

やれやれ……………もう相手するのも疲れた……………

「「マホカント」」

俺は疲れたので『マホカント』の呪文を唱てから眠りについた

……第三者SIDE……

「氷ジャベリンの槍を消したぐらいでいい気にならないでもらいたいね。いいぞ！」

そう怒鳴って、ド・ロレーヌは呪文を唱えました。『ウィンド・ブレイク』……一気にシェンを木の上から吹き飛ばすつもりでした。シェンは何ともないかのように眠りについていました

ド・ロレーヌの『ウィンド・ブレイク』は強力な呪文で、たとえ竜種でも吹き飛ばせる自信がド・ロレーヌにはあったのです

「（もらった!）」

ド・ロレーヌがそう思った瞬間……

「え？」

シェンの前に張られた透明な障壁によって、ド・ロレーヌの放った『ウィンド・ブレイク』は行き先を変え、その詠唱者を襲いました

ド・ロレーヌは己の放った烈風によって壁に叩きつけられて気絶してしまいました

……SIDE END……

眠りから覚めると朝になっていた。しかし、非常に眠い……。・小僧の相手をしてたから、さほど時間が経ってない気がする

「…………やるべきことをしたら寝直すか」

そう考えた俺は寮塔のルイズの部屋の窓を覗き、ルイズを起こさないように才人の様子を窺う。才人は昨日の『ラリホー』がまだ効いているのか分からないが、寝息を立てて眠っている

「〔ラリホーマ〕」

昨日の今日で全快すると後々才人にとって面倒なことになり得るため、明日起きるように『ラリホーマ』の呪文を唱えて眠りを深くする

「……………」

呪文がちゃんと効いたのを確認した俺は寢床に戻る。ふと見ると、

小僧が寮塔の真下で倒れていた。　ああ、自分の魔法でここまで吹っ飛ばされたのか……………

「(ダモーレ)」

俺は身体の異常がないか調べるため、『ダモーレ』の呪文を唱える。すると、小僧のステータスが目の前に浮かび上がった。そこには……………

名前：ヴィリエ・ド・ロレーヌ

最大HP：表示OFF

最大MP：表示OFF

攻撃力：表示OFF

守備力：表示OFF

素早さ：表示OFF

賢さ：表示OFF

状態異常：気絶。それ以外の異常は見られない

という風に表示されている。　状態異常以外の欄が未表示なのは、俺がそう設定したからだ。　この世界では状態異常以外は無意味だし、プライバシーを侵したくないからな。　だから、名前も本人が名乗ってなければ未表示設定だぞ

で……………小僧は大丈夫みたいだし、ほっとくという手も

あるが、後々面倒なことになるしな

「仕方がないな．．．．．「オクルーラ」」

そう呟いた俺はルーラの複合魔法『オクルーラ』を唱えた。これは『ドラゴンクエスト列伝 ロトの紋章』に出てくるオリジナル魔法だが、使用可能であることは確認済みである。どうやら、ゲームだけでなく、漫画などのドラゴンクエスト関連の魔法や特技は全てできるみたいだ。まあ、ドラクエシリーズ以外の呪文はこれしか覚えてないわけだが．．．．．

それはさておいて対象者である小僧が飛んでいった先は窓があいている部屋だった。恐らく、窓から抜け出してここにきたのだろう

小僧が部屋の中へと入ったことを確認した俺は睡魔に逆らうことなく眠りについた。ああ、そう言えば人間の状態での魔法・特技の確認をするんだったっけ．．．．．まあ、それは起きてからでいいか．．．．．

「シェンさん……………」

「……………うん。　ちょいやり過ぎた」

ロビンの問いかけに俺はそう呟く。　今現在、俺たちの周りにはオ
ーク鬼の死体が転がっている。　その理由を語るには昼頃に遡らな
ければならない

……回想……

「ねえ、シェン！」

「何か用かい、主？」

惰眠を貪っていると主のモンモンに呼ばれた。　目を開けて用件を
聞く

「あなたにお願いしたい事があるんです」

「　　願い事？」

あの時、威圧をかけたのがいけなかったのか敬語のままの主、モン
モン。　まあ、それはさておき、願い事とは何だろうか？

「香水用の秘薬“オークモス”を取ってきてもらいたいんです」

「・・・・・・・・・・うむ」

俺はそう呟くと思案顔をする。秘薬を取りに行くというのは構わない・・・・・・・・・・構わないが、それが何なのか、それがどこにあるのかが分からんと返事のしようがない

「私が知ってるよ、シェンさん」

どう返事しようか悩んでいると、モンモンの肩に乗っているロビンがそう口を開いた。ふむ・・・・・・・・・・ロビンが知っているのなら大丈夫か・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・あい分かった。その願い引き受けよう。ロビンも一緒に連れていくが構わないか？」

「は、はい」

「うむ」

俺はそう言つと顔をモンモンに近づける。モンモンは『よ、よろしく願います』と言って、ビビりながらも肩に乗せていたロビンを俺の頭に乗せた

俺はロビンが蠱にしがみついた事を確認して空へと飛びあがり

「ロビンよ、その秘薬“オークモス”とやらがある場所を思い浮かべてくれ」

「分かったの」

「では………（ルーラ）」

『ルーラ』の呪文を唱え、秘薬があるという場所へと向かった

【シェンが一瞬で飛んでった様子を見ていたモンモンが驚いたのは言うまでもありません】

「どこかい？」

「うん！ でも凄いね、シェンさん。一瞬で着いちゃうんだもん」

「ははは、そうか？ さて、秘薬を探すでしょうか」

「うん」

あ、そうだ。ここはロビンしか見てないから、テリーで搜索するか

「どうしたの、シェンさん?」

「いや、ちょっとな。ロビン、ちょっとそこの葉っぱに乗ってくれ」

「? う、うん」

ロビンを近くの葉っぱの上に乘せた俺は『ドラゴラム』の呪文を唱えてテリーへと変化する。ロビンは『凄い! 凄い!』とはしゃいで、完全にテリーになった俺の肩に飛び乗ってきた

「ねえ、シェンさん。どうやってるの?」

「秘密だ」

「むう。ケチ」

「お前なあ」

「えへへ」

頬を膨らませてすねるロビン。俺は苦笑しながらロビンの頭を撫でる。すると気持ちよさそうに目を瞑った

さて、ロビンの機嫌が直ったところで秘薬探しを再開しよう

「で、“オークモス”とやらはどこにあるんだ？」

「えっとね、ご主人様が教えてくれたんだけど」

「うんうん」

「オーク鬼が集まっている木の根元だつて」

「うんうん……ん？　オーク鬼？」

「うん。　オーク鬼」

「オーク鬼っていうと、ニメートルほどの身長と人間の五倍の体重、豚の顔と肥満した肉体を持つ亜人で、手だれの戦士五人に匹敵する戦闘力を持ち、鬼の名の通り人間を喰らうと言われるあの……」

「うん。　そのオーク鬼」

ロビンよ。　何故、そんなに落ち着いてんだ？　お前にとつても物凄く危険な亜人でしょうが……」

「シェンさんは凄い強い竜だから、安心だもん」

だもん♪　って………まあ良い。　なるべくオーク鬼に見つからなければ良い事だ

そう思った俺は話を戻すことにした

「で、何故オーク鬼の集まる木の根元なんだ？」

「ご主人様曰く、オークモスはオーク鬼の大好物なんだって」

「ああ、だからね。じゃ、オーク鬼を探しますか」

「うん」

俺とロビンは“オークモス”を探すため、オーク鬼がいそうな場所へと向かって

「ふぎい！」

「ぴぎっ！」

「あぎっ！」

『『『『『
んぐいいいいいいッ！』』』』』

——いけなかった。オーク鬼により、囲まれていたからだ。あ
らら、こりゃ大ピンチってか？

「はぁ．．．．．運が良いのか、悪いのか。　ロビン、俺の襟に隠れてろ」

「う、うん！」

俺はそうため息を吐くとロビンに命令する。　取り乱すかと思ったが、意外に冷静な俺にちよっと吃驚している。　まあ、それはその方が良くから良いが．．．．．どうすっかな．．．．．？

俺は『ドラゴンスレイヤー』を抜いて構えながら、考えていく。
あ、一度やってみたい剣技があったんだった

「ふう．．．．．」

俺はゆっくり息を吐くと棍棒を振りあげて襲ってくるオーク鬼たちを見据える。　そして、無数の棍棒が振り下ろされた瞬間、空高く跳び上がり回避し、両手を広げてデインエネルギーを溜め

「ギガ．．．．．ブレイク．．．．．！！」

中心に集まっているオーク鬼たち目掛けて、剣状のオーラを振り下ろして攻撃した

『『『『『ぶぎやあああああっ！？』』』』』

『ギガブレイク』が直撃したオーク鬼たちは焼き豚みたいにプスプスと煙を立てて倒れ込んだ

……回想終了……

とまあ、そんな感じだ。　　ちょっと、雑草も焦げてしまったんだけどね

「さて、オーク鬼がここにいたということはこの辺りに“オークモス”があるワケだ」

「うん、多分」

「さあ探すぞ」

「うん！」

そう切り出した俺はロビンと共に周辺の木の根元を搜索する。　すると、一つの木の根元に苔がびっしりと生えているのを発見した

「これか？　“オークモス”というのは？」

「うん　これでご主人様も喜ぶね」

「ああ、そうだな」

俺はロビンの背中の小壘に“オークモス”を入れると、ロビンを葉っぱの上に乗せて変身を解いた

「さあ、帰るか」

「うん」

ロビンを鬣にしがみ付かせて俺は空へと飛びあがり、『ルーラ』の呪文を唱えて魔法学院に帰った

【その後、モンモンが作成したシェンとロビンが持ち帰った“オークモス”入りの香水は高値で売れましたとさ】

モンモンにロビンと小壘を渡した俺は学院近郊の森へとやってきて、人間の姿における魔法・特技について確認していった。で、確認

して思ったことが、『セーブしないと後々面倒なことになりそうだ』
ということだ

「今後の課題はセーブ力を高めるだな……」

今後の課題を決めた俺はあたりに誰もいないことを確認して、変身を解いて学院へと戻って寛ぎ始めた。で、昨日と同じようなりアクシヨンで食べ物を置いていくシエスタに苦笑しつつ、高級そうなお肉を『メラ』で焼きながら堪能したのだった

第五話（後書き）

雪

「はい、今回は才人が眠ってる間の物語の話です」

死神

「はあ。で、質問なのですが、ヴィリエとかいう少年は、使い魔を変えることは半永久的にできないことを忘れてるのですか？」

雪

「いいえ、忘れていたわけではありません。シェンに対して主であるモンモンよりも自分の指示を優先的に聞かせようとしたんです。まあ、結果は散々でしたけどね」

死神

「そうなんですか。で、後半は秘薬取りですか。というか、よくぶつつけ本番で『ギガブレイク』が放てましたね、彼」

雪

「それはデフォで『魔法・特技の発動条件を理解できる』というスキルがありますから」

死神

「ああ、そう言えばそんなの付けましたね」

雪

「……………感想・質問などを良かったら送ってくださいね」

死神

「何かすいません・・・」

第六話（前書き）

雪

「第六話、更新しました」

死神

「んんん（・・）さん、武藤遙矢さん、使徒さん、墮落したユグドラシルさん、agudogarudoさん、感想及び誤字報告ありがとうございます」

雪

「少しキャラが崩壊しているかもしれませんが、本編をどうぞ」

第六話

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

食事を終えて肉の入っていた籠を食堂の使用人入り口の前に置いた後、惰眠を貪っていると誰かの気配を感じた。また、あの小僧かと思ったが、気配が二人分なのが気になるな・・・・・・・・

顔を動かさずに視線を気配の方に向けると、そこには昨日のヴィリエトかという小僧と、先生らしき人物がいた

その二人は俺が見ているのにも気付かず

「ミスタ・ロレーヌ。私を呼んだわけを言いなさい。本来、この時間は歩きは禁止されているのだぞ」

「・・・・・・・・ミス・モンモランシの使い魔が理由なく僕を傷つけたのです」

「何だと？ ミス・モンモランシの使い魔がかね？」

「・・・・・・・・はい」

「むむむ。使い魔が主である人間を傷つけるとは何たること。それは捨ておけん。ミスタ・ロレーヌ、その罰当りの使い魔の下へ案内しなさい」

「・・・・・・・・はい（ニヤッ）」

という遣り取りをして、こちらに向かってきた。 小僧・・・・・・・・

「おい！ 貴様が！？ このメイジを傷つけたという使い魔というのは！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

寢床の下へとやってきた先生らしき人物（ギトーだな）がそう怒鳴ってくるが、俺はそれを無視し、視線だけをギトーの後ろに隠れているヴィリエの小僧に向ける

自分では適わないと思い、嘘をついて先生を利用するとは、つくづく愚かな奴だ・・・・・・・・

まあ、それは良い。 小僧の戯言を信じるギトーもギトーだからな

「私はギトー！ 四系統魔法の中で最も優れている「風」の使い手だ！」

「・・・・・・・・それがどうした、小童」

「っ、小童だと！？」

そのままの格好でそう呟くと、ギトーは頭に血が上っているのか顔を赤くしている

コルさんなどの知らせで俺が喋れると知っているとは思うが、大抵の人物は驚くんだが、どうやら怒りが驚きより勝っているというところかな

ふっ、これはいい。もっと怒らせてやるか

そう考えた俺は顔をあげ、ギトーを睨みつける

「我はこの世に生を受けてから数千年の刻を過ごしてきた。二十そこらしか生きておらん小童に小童と言って何が悪い」

「何だと!？」

「小童。お主はさつき、四系統魔法の中で最も優れているのは「風」と言ったが、それは違う。四系統の「火」、「水」、「風」、「土」が調和を保っているからこそ、この世は存在できるのだ。四系統は等しく優れていると言っても良い。「風」が最も優れている? 笑わせるな!」

「ぐぐぐぐ……言わせておけば! こうなったら、「風」が最も優れていることをお前の身体に教えてやろうではないか! ユビキタス・デル・ウィンド——」

「何をしているのですかな」

俺の適当に言った言葉にキレたギトーが呪文を唱えようとした時、ギトー達の後ろから声が聞こえてきた

この声はコルさんか………？　そう思い、声が聞こえてきた方へ視線を向けると、暗闇から姿を現したのは

「ミスタ・コルベール………」

「何をしとるのですかな？」

思った通り、コルさんだった。　コルさんはギトーに視線を向け、もう一度そう訊ねる

ギトーは苦虫を噛み潰したような顔で説明していく

「………ミスタ・ロレーヌ、嘘はいけませんぞ」

「………（ビクッ！）」

一通り話を聞いたコルさんはギトーの後ろで隠れている小僧に視線を向け、そう言い放った。　ほう、あの話が嘘と見破るとは………
…流石、コルさんと言ったところか………

「嘘………？」

「左様。ミス・モンモランシの使い魔は今まで見たことのない竜であるが、数千年以上の刻を過ごしていることは雰囲気で分かる。その竜が理由なく人を襲うとは考えにくい。そうではないかね、ミスタ。君は「風」の使い手だ。風の流れて、この竜の力量を測れるはずですぞ」

「すいません、コルさん。俺は生を受けてからまだ二十八です。しかも、一回死んでます」

「むむむむ………」

「………そのようなワケでここは引いてくださいますかな、ミスタ？ このままだとオールド・オスマンに報告せねばなりませんので」

「………失礼する！」

ギトーはコルさんを睨みつけてそう告げると、教員塔へと戻っていった。そして、その場には俺と小僧、コルさんの三名が残った

「………君もだ、ミスタ・ロレーヌ。貴族としての誇りを十分に考えなさい」

「………」

小僧は何も言わず、立ち去っていく。 やれやれ、そこまで愚かなヤツだとは……………

呆れて立ち去る小僧を見つめていると、コルさんがこちらを振り返って頭を下げる

「……………我が生徒と同僚が失礼したね」

「些細な事だ、気にするな。 して、我に何か用かい？」

「！！……………何故、私があなたに用があると分かったのですかな？」

コルさんは俺の言葉に驚くが、すぐに表情を引き締めて俺にそう訊ねてくる

「我がいる場所は君がいる部屋の反対側だからな」

そう。 この場所はコルさんがいる研究室の反対側にある。 当直と言っても門の詰め所に待機しているだけだ。 こちらに来たと言うことは俺に用があると思うのは定石だと思う

俺の言葉にコルさんは頭をかきながら苦笑して口を開く

「うむ。 あなたの言う通り、用があつてこちらに来たのだよ。

あなたの事を知りたくてね」

「我の事？」

「ああ。あなたは韻竜ではないのかとね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

韻竜か・・・・・・・・まあ、この世界では龍が人語を操るということ
で韻竜であると考えるのは当たり前か

俺は韻竜ではないと言っても良いが、韻竜でもない龍が人語を操っ
ているというのはおかしいなあ。さて、どう説明するか・・・・

「いや。あなたの正体を暴いて、城に知らせようというのではな
い。単にあなたの正体に興味があつてね」

黙って考えていると、コルさんは俺が警戒していると思ったのか、
そう口早に弁解してきた

ふう、仕方ない・・・・・・・・多少、話を盛るとするか

「君の名前は何という？」

とその前にコルさんの名前を聞いておく。いきなり名を呼んで説明を求められても面倒だし、ここは聞いといった方が得策だ

「ああ、そう言えば言っていなかったね。私はジャン・コルベールと言う」

「コルベールか……。私は神龍。だが、主にシエンと名前を付けてもらった。シエンと呼ぶと良い」

「シエンだね。分かった」

「では、コルベール。我の話は他言無用で願う」

コルさんは頷くと、石に腰かけて聞く態勢を取る

「……………コルベール、最初に言っておこう。我は韻龍ではない」

「そうなのかい？　しかし、雰囲気が他の竜種とは違う。また、人語を操る竜は韻龍の他には知らんのだが……………」

「実際、我は人語を操っているわけではない。君たちの脳に直接話しかけているのだ」

「何と！　それは真か！？」

コルさんは驚いて、石から立ち上がった。俺はそれを制し、落ち着かせた

「実際はそうだが、人語を操るといのはあながち間違いではない。我が人語を操れると思っけていても良い」

そう補足した俺は、今から話すことは他言無用ということを再度念を押してから語りだした、嘘の俺の物語を

「………コルベール。君は並行世界パラレルワールドというのを知っているかい？」

「パラレルワールド？」

「この世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界の事をいう」

「何と！ この世界とは違う世界があると言うのですかな！」

「ああ、そうだ」

「むむむ。それは興味深い………」

コルさんはそう言つと、しばらく考えこむ姿勢になった

「話を続けてもよいか？」

しばらく考えが纏まるのを待った俺は考えこむコルさんに声を掛けた

「ああ、失礼した。話を聞きましょう」

「うむ。並行世界の話をしたのは他でもない。我は別の世界から来たからだ」

「別の世界から……なるほど……」

「我はこの世界とは異なる世界で生まれ、数千年の刻を過ごしてきた。その世界で数千年を生きた龍は我だけ。我は神の力を持つようになり、神龍となったのだ。人語を操れるのは我が数千年生きた龍だからだ」

「なるほど……では、あなたがこちらに来たわけというのは？ 元いた世界から召喚されたのですかな？」

「いや、この世界に来たのは偶然だ。召喚もこちらの世界に来た時だ」

「偶然……では、世界を渡ろうと思ったわけは？」

「魔王を倒した勇者の願いを全て叶えたからだな。我は神の力の使い道を我が認めた者の願いを叶えると見定めた。それから、その者が現れるのを待続けた。そして、世界が魔王という輩により、闇に支配されようとした時、勇者が現れ、その魔王を討ち果

たしたのだ。 我はその勇者こそが我が認める者であると感じた。
その者が我のところに見れたため、力を試そうと戦いを挑み、我は敗れた。 我はその者の力を認め、願いを叶えたのだ。 それから、その者は毎回、我が出す試練を乗り越え、全ての願い事を叶えていった。 その後、その者はアレフガルドという世界へと旅立っていった。 我はこの世界での役割を終えたと思った。 だから、今後は自分のために生きてみるかと考え、残りの神の力を使い、新たな世界に旅立ったのだ。 そして、着いたのがこの世界ということだ。」

「なるほど、なるほど」

コルさんはしきりにそう呟きながら頷いている。 さて、時間も時間だな。 話はここら辺でお開きとするか……。 魔法や特技については、いつか話すでしょう

「 我の話は以上だ 」

「 ああ、良い話を聞かせてもらった。 ありがとう、シェン 」

「 いや。 では、我は眠る 」

「 ああ。 そうだな。 私も戻るとしよう。 では、おやすみ 」

コルさんはそう挨拶をすると、自分の研究室へと戻っていった。 それを見送った俺は顔を身体に埋めて眠りについたのだった

しかし、あの話で良かったかなあ。相当、無理がある気がする

まあ、コルさんが納得してたから良いとするか……………

朝の光で目を覚ました。コルさんとの会話から数時間つてところか……………

「さて、二度寝をするのも良いが、ここは才人の様子でも見に行くか」

そう思った俺は、才人がいるルイズの部屋の窓まで近づき、そつと中の様子を窺った

おつ、目を覚ましたか。才人は左手のルーンを見つめていた。包帯は巻かれていないところを見ると、机に突っ伏して寝ているルイズがやったのだろう

ああ、見つかると面倒だな

「レムオル」

そう思った俺は『レムオル』の呪文を唱えて姿を消す。見なければいいじゃないかと思うかもしれないが、暇潰しということで勘弁してもらいたい

【コンコン、ガチャ】

その時、ノックがあつてドアが開いた。入ってきたのはシェスタだった

シェスタはパンと水をのせた銀のトレイを持ちながら、才人を見ると微笑んだ

『シェスタ・・・・・・・・』

『お目覚めですか？ サイトさん』

『うん・・・・・・・・俺・・・・・・・・』

『あれから、ミス・ヴァリエールが、ここまであなたを運んで寝かせたんですよ。先生を呼んで“治癒”の呪文を、かけてもらいました。大変だったんですよ』

『“治癒”の呪文？』

『そうです。 怪我や病気を治す魔法ですわ。 ご存知でしょう？』

『いや……………』

才人は首を振った。 ここでの常識が才人に通用すると思われるのは困るだろうなあ

『治癒の呪文のための秘薬の代金は、ミス・ヴァリエールが出しました。 だから心配しなくていいですわ』

『そんなにかかるの？ 秘薬のお金って』

『まあ、平民に出せる金額ではありません』

平民の賃金って、一体いくらになるんだ？ というか、そんな高い秘薬を使わないといけなくなるまで怪我をするってよく生きてるな、才人……………

『よっ……………』

『あ、動いちゃダメですわ！ あれだけの怪我では、“治癒”の呪文でも完璧に治せません！ ちゃんと寝てなきゃ！』

才人が起き上がろうとしたが、シエスタが凄腕でそれを制し、そう告げてくる。 その剣幕に圧され、才人は素直にベットに寝転

んだ

いや、大丈夫なんだけどなあ

「ダモーレ」

『ダモーレ』の呪文を唱えて才人のステータスを見る。そこには『状態異常：異常なし』と出ているから、傷は完治していると言える

まあ、シエスタはそのことは知らないから、あの行動は正しいんだけどね

『ありがとう……俺、どのくらい寝てたの?』

『二日間、ずっと寝続けてました。目が覚めないんじゃないかって、皆で心配してました』

『皆って?』

『厨房の皆です……』

シエスタは、それからはにかんだように顔を伏せた

『どうしたの?』

『あの………すみません。あの時、逃げ出してしまつて』

『いいよ。謝ることじゃないよ』

『ほんとに、貴族は怖いんです。私みたいな、魔法を使えないただの平民にとっては………』

貴族は怖いねえ。まあ、人を殺めることができる魔法が仕えるというのは、使えない者にとっては恐怖以外何ものでもないかもしれない

『でも、もう、そんなに怖くないです！私、サイトさんを見て感激したんです。平民でも、貴族に勝てるんだって！』

『そう………はは』

シエスタはぐつと顔をあげ、目をキラキラと輝かせながら、そう宣言した。才人は何だか照れ臭かったのか頭をかいている

才人の様子を見る限り、どうして勝てたのか不思議がつている感じだな

「はあ」

その時、欠伸が出た。さて、才人も起きたことを確認したし、二

度寝に洒落込むとするか……

俺は『レムオル』の呪文を解除すると、寝床に戻って惰眠を貪り始めたのだった

第六話（後書き）

雪

「はい、今回の話はヴィリエが再びとシェンの過去（嘘）の話です」

死神

「ヴィリエって自分では適わないから嘘を言って先生を引き連れてくるって、相当な愚かなヤツですね。しかも、自分は先生の後ろで隠れるって……」

雪

「そうですね。まあ、その嘘に騙される方も相当ですけどね」

死神

「で、一触即発の時に現れたのがコルベールさんですか」

雪

「ええ、普通に出しても良かったんですけど、その方が面白いかなと思います」

死神

「はぁ……で、シェンの話は嘘が九割ですね」

雪

「転生者であるということは話せませんね」

死神

「そつでしょっね」

雪

「では、この辺で。この小説を読んでくださりありがとうございます」

死神

「感想・質問などを良かったら送ってください」

雪

「お願いします」

第七話（前書き）

雪

「第七話、更新しました」

死神

「agudogarudoさん、ライガさん、しょうゆさしさん、暇人さん、ドツカノダレカさん、武藤遙矢さん、墮落したユグドラシルさん、感想ありがとうございます」

雪

「では、本編をどうぞ」

第七話

才人が目覚めてから今日で一週間が経った。その間、事件らしい事件は起きてはいない

敢えて挙げるとするならば、あの餓鬼（ヴィリエ）が每晚襲撃に来るぐらいだろうか……

最近は相手をせずに『ラリホー』の呪文で眠らして部屋に戻していたが、それでもヴィリエは襲撃を繰り返すため、昨日は最初のように『マホカント』の呪文を唱えて眠りについた

で、夜明けとともに起きてみたら、案の定のびていた。このままだと懲りないなと思った俺は、懲らしめる目的で餓鬼を喰えると、『レムオル』の呪文を唱えて姿を消し、男子寮のてっぺんに向かう
そして、てっぺんについた俺は餓鬼を下ろすと、『ドラゴラム』の呪文を唱えて人間形態になった。次に餓鬼の服を全て脱がし、その日のために持っていた縄で縛ると、塔に吊るした

「……………これで懲りてくれるだろう……………」

そう呟いた俺は『ドラゴラム』と『レムオル』の呪文を解除し、寝床に戻ると昨日渡し忘れた小壘を喰えてモンモンの部屋に向かった
最近、俺は人間形態でのセーブ力を高める訓練をするため、ちよくちよく外出している。モンモンには無条件で許可を得ているが、

俺の誠意として外出した際は秘薬の材料になるものを取ってきているのだ

「さて、朝早く起きたし訓練でもするか………「ルーラ」」

窓の枠に小壘を落とさない工夫をして置くと、俺は『ルーラ』の呪文を唱えて、訓練場所に向かった

「到着つて——（きゃあああああつ！？）ん？」

訓練場所（自然にできた森の広場）に到着するやいなや、人の叫び声が聞こえた。視線を向けると、尻餅について怯えている少女と怯えながらも少女を庇うようにナイフを構えている少年がいた

「何故、子どもが二人………」

この森は獰猛な獣が多い地帯。だから近隣の村はここを立ち入り禁止にしているはずだが………？

「うわーん！ 私たち、食べられちゃうよー！！」

「な、泣くなりリム！ ば、僕が守ってやるからな！」

「やっぱり、この森に入るなんてダメだったんだよー！！ お父さん達の言い付けを守らなかったから罰があたったんだよー！！」

「そ、そんなこと言うなよ。 お母さんの病気を治す薬草があるつてお父さんが言ってたし、それはこの森しかないって言ってたんだから仕方がないじゃないかー！」

「うわーん！ お父さーん！！」

うーむ……この二人は親たちの言い付けを無視して、立入り禁止の森へと入ったらしい

さて、これは困ったぞ

俺は二人が言うようなことはしないから、このまま立ち去るフリをしても良いんだが……そこは問屋が卸さないんだよなあ。

俺が立ち去ったとしても、他の獣にこの二人はやられてしまう可能性がある

さて、どうしよう

「……よし。 これしかないか……」

俺はそう呟くと、二人とは反対の方向の森へと向かった。そして、二人には見えない場所で『ドラゴラム』の呪文を唱えて人間形態になると、急いで二人の所に戻る

「ち・・・・・・・・っ！ 早速のおでましか・・・・・・・・！」

二人の背後に巨大オオカミが現れたのに気付く。しかし、二人は呆けているらしく、背後の巨大オオカミに気付いていない様子だった

俺がここで特訓を開始してから一週間経つが、あんなオオカミは一度もあつたことがない。何故ここにといい疑問が浮かんだが、そんなことを考えている場合ではない

俺は剣を抜き、『ピオラ』と『バイキルト』の呪文を唱えてオオカミに猛スピードで『魔獣斬り』を放った

「が、があああああっ！？」

攻撃が直撃すると、オオカミは叫び声をあげてドスンと倒れこんだ俺は剣をおさめると、二人の方を向く。二人は何が起きたのか分からず、目を白黒させていた。やれやれ・・・・・・・・

「（ラリホーマ）」

「「あ・・・・・・・・」」

「・・・・・・・・ふう・・・・・・・・あ」

『ラリホーマ』の呪文を唱えて二人を眠らし、二人を支えながら一息ついた時、『オクルーラ』で二人を村へ帰せば良かった事に気がつく。それが最も安全かつ最も簡単だったよ……………」

「はあ……………まあ良い。さて、この二人を届けるか……………」

俺は気を取り直すと、二人を抱えて傍に落ちていた籠を背負う。そして、『ルーラ』の呪文を唱えて二人の村に向かう。そして、村の近くに到着した時、村の中が騒がしい事に気が付く

どうやら、この二人を心配して捜しまわっているらしい。二人は内緒で森に入っていたみたいだな……………それは仕方がないが、本当に無茶をする子ども達だ

俺は呆れつつも村に入ると、一人の男性が気付いて近寄ってきた

「エリム！ リリム！」

「あなたがこの二人の親かい？」

「はいっ！ 朝起きたら、二人の姿が見えないので捜していたんですが……………二人はどこに？」

「……………立入禁止の森の中だ」

「え!？」

俺は二人を父親に手渡しながらそう告げる。 父親はその言葉に驚愕の表情で抱える二人を見つめた。 周りの村人もざわざわとして驚いている様子である

「……………二人は母親を助けようとしたみたいだ」

「え？」

「これを見てくれ」

「じ、これは!」

背負っていた籠をおろして薬草類を見せると、父親はその中身に驚いた表情をする

「無茶をして……………」

そう呟いた父親は眠っている二人の頭を優しく撫でながら俺の方を向き直し、こう告げてきた

「どなたか知りませんが、二人を助けていただきありがとうございます」

「いや、礼は良い。それよりも奥さんが良くなることを祈っているよ」

「はい」

俺はそう言つと、挨拶もそこそこに村を出る。そして、村が見えなくなった場所まで来ると、『ルーラ』の呪文を唱えて訓練場所へと戻ったのだつた

「ふう・・・・・・・・」

訓練を終えた俺は一息つくと、昼休憩の時に食べたオオカミの骨に腰を下ろす。こいつは朝、子ども達を守るために殺したオオカミだ。あの時は仕方がなかったが、やはり無益な殺生はいただけない

だが、今回の特訓で、大分力をセーブできるようになってきた。これならば獣を気絶させるだけに留めることもできるだろう

「ん？」

『『『『ぐるるるるる！！』』』』

「あらら。こいつの仲間か……………」

その時、四匹のオオカミが前方から現れた。俺は仲間の報復に來たと思い、慌てることなく立ち上がって剣を構えた。その時、オオカミ達の会話が聞こえてくる

「おいおい。こんなヒョロッとした人間にやられたのか、カムは？」

「がははは。こんなヒョロッとした人間にか？相当、バカなやつだな！」

「そうだな。カムが全然帰ってこないから誰かに殺されたと思っていたが、こんなヒョロッとした人間に殺されていたとは思わなかったわ」

「なに。カムは群れの中で一番弱かったんだ。あの人間がまぐれで勝ってもおかしくはない。そうだろう？」

「「「違いない！がはははは」「」」

「やれやれ……………」

その会話に呆れた俺はそう呟いて剣をおさめると、『ドラゴラム』を解除して神龍に戻った。人間のままでも良かったが、こいつらにはそれ相応の罰を与えねばならないと思ったからだ

「「「「.....」」」」

四匹は俺が突然龍となったためか、啞然と俺を見上げてくる。俺は身体を最大にして四匹を睨みつけた

「「「「ひっ!？」」」」

「小童ども、どこへ行く.....」

「「「「(ビクッ!)」」」」

情けない声を出して四匹が逃げようとしたため、殺気とともに重低音の音を出す。小童どもはビクッとなって動きを止めると、恐る恐るこちらを見てきた

その顔は先程までの笑みではなく恐怖で歪んでいたが、俺は構わず口を開く

「お前らが仲間のために来たと思って、剣を構えて迎え撃とうした

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「竜殿、お待ちください！」

俺が稲妻をいつでも放てる状態にしたまま森を見つめていると、その声とともに三匹の才オカミが飛び出してきて俺と小童どもの間に降り立った

その三匹は、小童どもよりも一回り身体が大きく、毛並みも美しく尻尾も立派だ。そして、最大の特徴として身体に薔薇のような模様があるのに気付いた。これは小童どもにはない特徴である

数秒間、見つめ合っていると、三匹の中でも毛が一際白く輝いている才オカミが、一歩前に進み出て口を開いた

「私は群れの長をしているイザナギと申します。 此度は孫たちが御無礼を働いて申し訳ありません」

「・・・・・・・・いや、無礼を働いたわけではない・・・・・・・・小童どもの性根を氣にくわなかったただけだ（ギロツ）」

「「「ひっ!?!」「」」

俺は長老・イザナギのお詫びに対し、『いなずま』を解除してそう告げながら小童どもを睨む。小童どもは情けない声を出して後ろに控えている二匹の背中に隠れてしまう

「……それに我はお前らの仲間を殺したのだ。お詫びと
いうのなら、こちらが言すべきものだ」

「いいえ、それには及びません。それは私たちにとって当たり前のこと。カムが死んだことは悲しいですが、竜殿を恨みはしませんよ」

イザナギは俺の言葉に対してそう返事をする。俺は『そうか……』と呟くと、体を縮小して広場に降り立った

「さて、話を戻すでしょう。イザナギよ……お前は小童どもの事を自分に免じて許してくれと言いたいのだな？」

「はい。孫たちはまだ若輩。今後は私どもがしっかり教育していくので、何とぞお許しください」

「もとより、小童どもを殺すつもりは毛頭ない。小童どもの事は
お前に預けるとするよ」

「はい」

イザナギは俺の言葉に頷くと、二匹の背中に隠れている小童どもの方に振り返ると

「ファトユナ、アレヴ、ネヒル、ヘウエラン」

「「「「は、はい……………!」」」」

小童どもの名を呼ぶ。小童どもはそう返事をする、二匹の背中からでてくる。その表情は、俺に殺されずに済んだことによる喜びと、イザナギが今から言うことによる不安が入り混じっていた

「……………今までから今回までのお前達の勝手な行動の罰を受けてもらう。良いな」

「「「「はい……………」」」」

「……………では、竜殿」

「ああ」

イザナギは小童どもにそう告げ、俺の方を向いて頭を下げると、小童どもと一緒に森へと入っていく

俺はそれを見送ると、『ドラゴラム』の呪文を唱えて人間形態になる。それは骨の後始末をするためだ。このまま放置していても大丈夫だが、これは俺の気分の問題だ

「さて、どうするか……………」

俺はどう呟くと、後始末の方法を考えながら骨に近づく

「……焼くと森も萌え——もとい、燃える可能性があるから、ここは切り刻んで細かくするか……」

そう結論付けた俺は『バキクロス』の呪文を唱えた

【バキバキ】

複数の鎌鼬が発生し、骨を砕いていく。骨の量が多いせいか多少時間がかかるが、まあ大丈夫だろう

「あつ、そう言えば……」

全ての骨が砕けて砂状になった頃、モンモンがオオカミの骨を砕いた砂を欲しがっていたのを思い出す

「……どの種類のオオカミでもかまわないのと言ってたし、少しもらっておくか……」

俺は小壘を取り出すと、その中に骨を少量入れると、砂状の骨を広場に巻いていく。そして、全ての骨を巻き終えた俺は広場の中央にたち、黙祷を捧げる

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

しばらく黙祷を捧げていると、二つの気配を感じる。視線を向けると、二匹のオオカミが俺を見つめていた。二匹は俺に近づくと、『先程の竜さまですね』と訊ねてきた

「そうだが・・・・・・・・ああ、お前達はイザナギと一緒にいた。一体、どうしたんだ・・・・・・・・？」

「はい。　竜さまにお話があります」

「そうか・・・・・・・・」

俺はそう呟くと、近くの岩に座って聞く態勢をとった

「話を聞いていただき、ありがとうございます。　私は長老・イザナギの娘、アマテラスと申します。　そして」

「弟のツクヨミです」

そう二匹が自分の名を告げてきた時、俺の名を言い忘れていた事に気付く

「……そう言えば、俺の名を教えるのを忘れていたな。
俺は神龍。 シェンと呼んでくれ」

「「はい」」

「……して、話とは……」

「父から竜さまにお礼をするよう仰せつかり、戻ってまいりました」

「礼……」

俺はアマテラスの言葉に首を傾げてしまう。 なぜなら、お礼をし
てもらった理由に見覚えがないからだ

「……礼というのは、あの子達の事なのです」

「あの子達……？ ああ、あの小童どもの事が」

「はい。 あの子達は——」

アマテラスは頷くと、小童の事などを語りだした。 それによると、
強い力を秘めながら生まれてきた小童どもは将来を嘱望されていた
が、成長するにつれて己の力に溺れるようになり、力を見せびらか
したり、弱者の力を嘲笑うようになり、問題行動が目立ち始め
たらしい。 最近では、弱者に群れの掟を破るよう要求し、断われ
ば集団で痛めつけて無理矢理従わせるようになったという

「……………最初は比較的軽い掟破りでした。しかし、それが次第にエスカレートしていき、今回あの子達は群れ最大のタブーを犯させようとしたのです」

「そのタブーとは……………『人間殺し』です。父の話によると、僕らの種族は人間の血を浴びると理性がなくなり、ただの殺戮するだけの猛獣になってしまうとのことです。僕らは見たことがないので分かりませんが、父がまだ子どもの頃に一度、そういうことが起きたそうです」

「なるほど……………しかし、俺が殺した奴は人間の子供を襲おうとしていたんだが……………」

俺は朝の出来事を思い出し、二匹に告げる。すると、二匹は顔を伏せてしまう

「それはあの子達のせいでございます」

「カムはそれは優しい心の持ち主であの子達の格好の標的にされていたのです」

「……………なるほど……………」

二匹の言葉に俺はそう呟くと腕を組んで、あの時の事を考える。あの時、奴は子どもを襲うとしていたが、本当は襲いたくなかった

のかもしれないな……

「……恥ずかしながら、私たちがそれに気付いたのはあの子達がこっそりと住処から抜けだそうとした時の会話だったのです。その後、私たちは父に報告し、急いであの子達を追いかけたのです」

「そうか……それで、今に至ると言うワケだな？」

「はい」

アマテラスの言葉に俺が腕を解きながら告げると、二匹は頷いて更に話を続けていく

「……シエンさまのお陰で、あの子達も気付いたことでしょう。自分たちが如何に狭いところで威張っていたのかを。自分たちの力をもってすれば敵わないものなどいないというのが、驕りであったのを」

「今後、あの子らが力に溺れることはないでしょう。これもシエンさまのお陰。だから、僕は感謝の気持ちとしてお礼がしたいんです」

「うむ……」

俺は二匹の言葉にそう呟くと、空を見上げてどうするか考えていく。

お礼がしたいという二匹に対して無下に断ることもできないからだ

二匹に視線を戻すと、黙って俺の返事を待っている。ふう……
・仕方がない

「分かった。そういうことなら、お礼をしてもらおうか」

「ありがとうございます！」

「僕らがができることならば何でも仰ってください」

「そうか……」

俺はそう呟くと立ち上がり、二匹に近づく

「お前たちには俺の手伝いをしてもらいたいのだが、良いかい？」

「手伝い？」

「ああ」

体に触れられるところまで近づいた俺は二匹にそう告げると、『俺の指笛の音を聞いたら、必ず駆けつけてほしいこと』、『指笛はどこにいても聞こえること』、『その時、ジャンプをすれば一瞬で俺のところに行けること』など……つまり『オオカミアタック』の使役狼になってほしいという事を説明していった

以前、『オオカミアタック』を試した時、狼との契約が必要な事が分かった。だから、今この二人を使役狼にできたらなと考えたのだ

「これは強制ではない。できないと言うのなら、それでも構わないが……どうだ？」

「大丈夫です、シェンさま」

「僕も大丈夫です」

「そうか……では、契約をするぞ」

「はい」

俺が手を額に触れ、『オオカミアタック』の使役狼の契約の呪文を唱えると、二匹の身体が一瞬光に包まれた。ふう……

「……よし、契約完了だ。アマテラス、ツクヨミ。これからよろしく頼む」

「はい！」

二匹は力強い返事をする、森の奥へと帰っていった。俺はそれを見送ると、『ドラゴラム』の呪文を解除し、『ルーラ』を唱えて学園に戻ったのだった

「…………でも何故、男子寮に縛られてたんでしょうね？」

「さあな。では主。夜も遅い、早く寝なさい」

「ええ、そうします」

学園に帰って小壘をモンモンに渡した時、ヴィリエが裸で男子寮に縛られていたことやそれが原因かどうか分からないけど風邪を引いたことを面白そうに語ってくる。俺はやりすぎたかなと思いつつ、モンモンがベットに入っただのを確認すると、寢床に戻った

『話が違っ！』

「ん？」

その後、かなり遅めの晩飯を食べていると、女子寮からそういう声

が聞こえてきた。視線を向けると、少年が宙に浮いているのが見えたが、直後に窓ごと吹っ飛ばされた

「・・・・・・・・あの炎は、キュルケか・・・・・・・・？」

そう呟きながら観察していると、吹き飛ばされた少年とは違う少年がやってきた。そして、その少年も火にあぶられ、地面に落ちていった

「おつ。今度は三人だぞ」

その三人もしばらくすると、案の定炎により、地面に落下していった

「やれやれ・・・・・・・・」

俺はそう呟くと、五人の少年を『ベホイミ』の呪文である程度回復させる。そして、それぞれの部屋に『オクルーラ』で飛ばし、全員入ったのを確認すると、食事を再開したのだった

第七話（後書き）

雪

「はい、今回はヴィリエ（最終章？）とシェンの特訓での出来事の話です」

死神

「ヴィリエは一週間毎日襲撃してたんですか？」

雪

「はい、でも、相手にされてませんでした」

死神

「まあ、そうですね。で、今回の出来事でヴィリエは懲りるんですか？」

雪

「さあ（悪笑）」

死神

「ええ!？」

雪

「シェンの特訓場所は、学園から10kmぐらい離れていて付近の村から立入禁止にされている森の中央にある開けた広場のようなところですよ。ここは特訓場所を探っている時に見つけたんですよ」

死神

「はぁ………で、そこで現れたのがオオカミですか。で、

このオオカミの種族名は何て言うんですか？」

> i 3 1 4 0 7 — 3 7 2 6 <

雪

「それは本編で教えたいと思うので、今は言えません。また、『オオカミアタック』については私の偏見と独断で書きましたので、そんなのダメだよ」と思ってもご了承ください m (— —) m

死神

「この二匹が活躍する時はいつになるんでしょう？」

雪

「いくつか候補があります。ですが、その時の私の気分で変わる可能性があるのです、ここで活躍します！とは言えません。ご了承ください m (— —) m

死神

「今回はそればかりですね」

雪

「ははは、すみません。では、この辺で終わりにします。この小説を読んでくださりありがとうございます」

死神

「感想・質問などを良かったら送ってください」

雪

「
お願いします
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6817s/>

ゼロの使い魔～神龍になった男～

2011年11月15日17時11分発行